

保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第3報

—— 大型紙芝居制作・発表を通して ——

高 杉 志 緒

The Third Action-Training Report on “*Shokuiku*”
Through the Production of “Large Scale Picture-Story Shows”
Presented at the Department of Early Childhood Education and Care Seminar
by
Shio Takasugi

要旨

本稿は、平成 22（2010）年度・平成 23（2011）年度の後期における、保育学科ゼミナール授業活動（総合学習）に関する教育実践報告である。平成 17（2005）年「食育基本法」が制定されて以降、保育の現場でも「食育」の導入が本格的に行われていることに鑑み、平成 21（2009）年度から報告者は「食育表現ゼミナール」を担当している。将来保育者を目指す学生を主体として、「食育」を子ども達に分かりやすく伝えることを目的としたカルタ・紙芝居・双六を制作し、発表してきた。本活動を通じて、領域「言葉」の実践学習を土台に「食育」に関する保育学科学生の資質向上を図ると同時に、栄養健康学科ゼミナール活動との連携・地域社会への貢献についても考察した。今後も、「食育」を主題とした表現活動を主体にした地域交流・実践活動ができるゼミナール活動の展開を目標としたい。

キーワード：食育基本法、紙芝居、下関ぶちうま食育プラン、垢田トマト、
ふく（フグ・河豚）、領域「言葉」

Summary

This paper is an educational action-training report on teaching activities (integrated studies) conducted during fiscal year 2010 and the latter half of fiscal year 2011. Ever since the enactment of the “*Basic Law of Shokuiku*” in 2005, “*Shokuiku*” or food and nutrition education has been introduced in Japan on a full scale even in the field of *Early Child Education and Care*. In view of this, I have

been placed in charge of the “*Shokuiku Expressive Seminar*” since fiscal year 2009. Composed mainly of students who wish to make a career out of *Early Childhood Education and Care*, presentations have been made of our production of *Karuta* or traditional Japanese playing cards, pictures story shows and *Sugoroku*, a Japanese variety of the game of Parcheesi, all for the purpose of conveying the concept of “*shokuiku*” more understandably to children. Through the said period of seminar activities, we strove to attain improvements in the quality of *Early Childhood Education and Care* students by placing the groundwork on regional “language”. At the same time, we also considered coordinating activities with the Health Nutrition Seminar and making contributions to regional society, and attempted to put these into practice. For the future, I would like to continue to set my goals on the holding of seminar activities, which place their theme on “*shokuiku*” and which are capable of putting regional interchange and action training into practice.

Key words : Basic Law of *Shokuiku*, picture-story shows, Shimonoseki “Just Tasty” *Shokuiku* Plan, Akada tomatoes, Fugu blowfish, regional language.

1 はじめに — 「食育表現ゼミナール」活動と本稿の目的 —

平成 17 (2005) 年 6 月「食育基本法」(法律第 63 号) の制定を踏まえ、平成 21 (2009) 年 4 月施行「保育所保育指針」第 5 章「健康及び安全」における「3 食育の推進」の新設、「幼稚園教育要領」第 2 章「健康」における「食育」の位置づけが行われ、現場での食育推進が課題となっている。また、下関市は平成 20 (2008) 年 3 月、平成 20 年度から 5 年間で計画期間とした食育推進計画『下関ぶちうま食育プラン』を策定し「学校・幼稚園・保育所等における推進」が行われてきた¹⁾。

このような「食育」重視の動向を踏まえ、報告者は本学保育学科において、平成 21 年度から「『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上」という目標のもと、選択希望学生を主体とした「食育表現ゼミナール」を担当している。「食育」に関する専門知識・指導については、適宜、本学の栄養健康学科教員に指導を受けて活動を進めている。平成 21 年度～平成 23 年度の活動概要は、平成 21 年度：「山口食育カルタ」制作・実践²⁾、平成 22 年度・平成 23 年度後期：大型紙芝居制作・発表、平成 23 年度前期「食育双六」制作・

被災地への送付である³⁾。

本稿では以下、平成22年度・平成23年度後期活動である「食育」を主題とした大型紙芝居制作・発表について活動報告を行う。

2 実践報告

保育学科ゼミナール（以下「ゼミ」と略記）は、学生が所属ゼミを選ぶ希望選択制であり、学生を主体とした授業活動である。各年度始めに全体説明会を行い、学生から所属希望調査を行った後、平成22年度は4月14日から、平成23年度は4月13日から活動を開始した。報告者が担当する「食育表現ゼミナール」（以下「食育表現ゼミ」と略記）に年間を通じて参加したのは平成22年度：2年生4名、平成23年度：1年生4名・2年生6名であった。2年生の学外実習期間は休講とし、平成23年度は全て1・2年生合同授業を行った。なお、平成22年度前期は「下関ぶちうま食育プラン」について自主学习を中心に行い、平成23年度前期は「食育双六」制作を中心に活動を行ったので、紙芝居作成・発表は両年度とも後期に行った。従って、本稿では平成22年度・平成23年度後期の活動概要を記す。

2・1 授業目標・実施概要

先に述べたように食育表現ゼミは、平成21年度より「『食育』に関する『言語表現』活動実

(表1) 平成22年度・23年度(後期)食育表現ゼミナール授業内容

平成22年度後期			平成23年度後期		
回数	授業日	内容	回数	授業日	内容
1	9月29日	大型紙芝居立案、登場人物設定	1	9月28日	被災地からのお便り紹介、大型紙芝居登場人物設定
2	10月6日	トマトの病気・成分調査	2	10月5日	下関の食材調査(イチゴ、メロン等)
3	10月27日	ストーリー作成・原画図案作成	3	10月26日	主題決定・食材調査・あらすじ作成
4	11月10日	模造紙下描	4	11月2日	ストーリー・挿入歌詞作成
5	11月17日	模造紙下描・色塗り	5	11月9日	模造紙下描・ストーリー決定
6	11月24日	模造紙色塗り・仕上げ	6	11月16日	模造紙下描・色塗り
7	12月1日	発表練習	7	11月30日	台本提出・稽古開始
8	12月8日	発表練習	8	12月7日	発表練習
9	12月11日 (金)	創作発表会リハーサル (於：シーモールホール)	9	12月14日	発表練習
10	12月12日 (土)	創作発表会 (於：シーモールホール)	10	12月16日 (金)	創作発表会リハーサル (於：シーモールホール)
11	12月15日	創作発表会反省会	11	12月17日(土)	創作発表会(於：シーモールホール)
12	12月22日	紙芝居確認・発表練習	12	12月21日	創作発表会撮影ビデオ鑑賞・反省会
13	1月12日	発表練習・公開講座打ち合わせ	13	1月11日	紙芝居変更台本配布、発表練習
14	1月16日	公開講座：親子で学ぶ「食」と「遊び」 参加、紙芝居披露	14	1月18日	「おにぎり教室」打ち合わせ、 紙芝居発表練習
15	1月19日	一年間の反省会	15	3月1日(木)	「おにぎり教室」参加・紙芝居披露 (於：下関短期大学付属第二幼稚園)、反省

践を通じた保育学科学生の資質向上」を目的として掲げ、1. 言語表現媒体・教材と「食育」についての学習、2. 実践的な言語表現能力の向上・実践、以上2点を主眼として授業・活動を進めている。

平成22年度・平成23年度後期に学習・制作の対象とした言語表現媒体・教材は、前期授業時に学生から希望があった「大型紙芝居制作・発表」と決定した。全15回の授業実施内容は以下の通りである(表1)。

以上各年度後期15回の授業(学外活動を含む)を行った。次に、紙芝居制作・発表を中心とした活動報告を年度別に行う。

2・2 平成22年度後期 教育実践報告

2・2・1 食育紙芝居「あすかちゃんとトマト」制作目的・あらすじ

平成22年度前期、食育表現ゼミ所属学生2年生4名は、下関市が発行した『下関ぶちうま食育プラン』(平成20年)を通じて4分野「1. 食生活の見直し(正しい食の知識を持つ、日本型食生活の良さを見直そう)」「2. 食への感謝、食文化の伝承」「3. 家族の団欒(家族の食事を大切にしよう)」「4. 食の安心・安全、地産地消」の重要性について学んだ。

当該授業活動は通年で行われるため、前期末に後期活動内容の希望を募った。その結果、毎年12月に社会活動として地域住民を対象に開催される「創作発表会」(保育学科主催)と公開講座活動(栄養健康学科合同活動、食育表現ゼミは第3回目1月16日を担当)に向けて、食育に関する大型紙芝居の作成・上演(約20分)を行うこと、主題はトマト(地元食材「垢田トマト」の紹介含む)とすることに決まった。

紙芝居における登場人物の設定・目的・あらすじは、担当教員の指導下にて学生が話し合って作成した。参加学生4名の内、トマトを食べることが苦手な学生が1名、祖母宅(県外在住者)で露地物トマトを栽培している学生が1名いたので、彼女達の体験を通して紙芝居の主人公を設定し、あらすじを決定した。即ち、主人公は幼稚園に通うトマトが嫌いな5歳児女子という設定にし、「トマトが収穫されるまでの過程を学ぶ」「トマト料理を知る」(『下関ぶちうま食育プラン』における「1. 食生活の見直し(正しい食の知識を持つ)」)ことを通じて、「2. 食材に感謝する」「4. 地産地消」(トマト特に地元食材「垢田トマト」に親しみを持つ)という目的を盛り込んだ紙芝居を制作・上演することとなった。

また、上演時の表現方法として、大型紙芝居は基本的に背景として使用し、ナレーター(1名)が傍で語り、登場人物(主人公「あすかちゃん」1名、あすかちゃんの祖母1名、トマトの妖精1名)は、紙芝居の前に出て台詞を語り、それぞれが配役を演じる劇形式をとることとした。各場面によるあらすじは以下の通りである。

第1場面（紙芝居1枚目、垢田トマトと主人公の紹介）

「トマト幼稚園」に通う「あすかちゃん」は、給食で新鮮な下関の「垢田トマト」が出るにも関わらず、トマトが嫌いである。給食で出る「垢田トマト」はビニールハウスという温かい部屋の中で育てられ3～6月に収穫される。とても甘く、イチゴやミカンにも負けない甘さである。

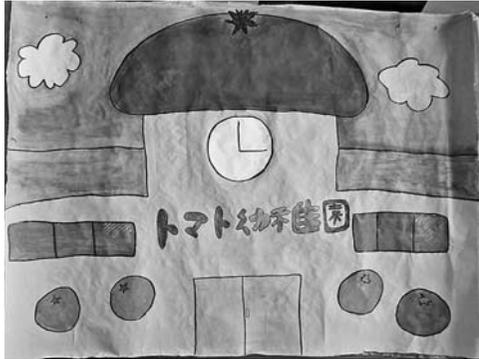


写真1 第1場面
(紙芝居1枚目、垢田トマトと主人公の紹介)

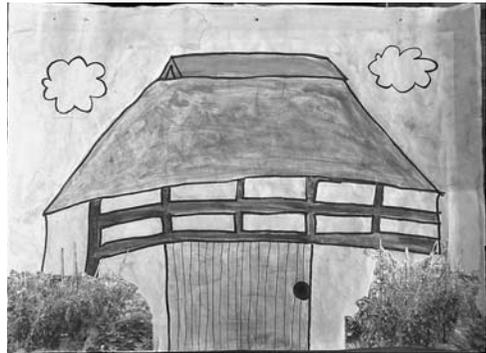


写真2 第2場面
(紙芝居2枚目、夏休みの祖母宅)

第2場面（紙芝居2枚目、夏休みの祖母宅）

夏休み、あすかちゃんは県外でトマトを露地栽培している祖母の家に遊びに行く。ところが新鮮なトマト料理を振舞おうとする祖母に反発して、祖母宅を飛び出してしまう。

第3場面（紙芝居3枚目、トマトができるまで）

あすかちゃんは、気が付くと祖母のトマト畑にいた。泣いているとトマトの妖精が現れて「トマトのことを知らないから誤解しているのではないか？」と声を掛け、トマトの原産地は南のアメリカで本来は夏に出来ること。祖母の畑、すなわち日本における露地栽培の流れについて、妖精がコマ割りされた紙芝居を示しながら、順を追って説明する（2～3月に種まき、4月苗植え・支柱立て、5月開花、6月～8月収穫）。

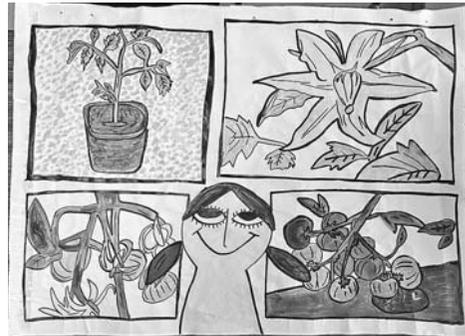


写真3 第3場面
(紙芝居3枚目、トマトができるまで)

第4場面（紙芝居4枚目、トマトの害虫・病気について）

トマトが美味しく実るためには、害虫から守る必要がある。「タバコガ」は折角できたトマトの実を食べてしまう。「アブラムシ」は茎や葉の汁を吸ってしまう。また「尻くされ病」という病気にかかるとトマトが腐って食べられなくなってしまう。トマトは害虫や病気といった「敵」と戦わなくてはならないことを妖精が説明する。

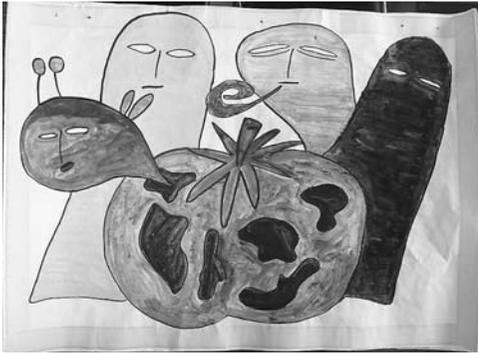


写真4-1 第4場面
（紙芝居4枚目、トマトの害虫・病気について）



写真4-2 第4場面上演風景
（トマトの害虫・病気、平成22年12月12日）

第5場面（紙芝居5枚目、トマトの栄養について）

トマトの実には沢山栄養が含まれる。人間を元気にしてくれる味方「トマトレンジャー」を妖精が紹介する。それは「体を元気にする赤いリコピン」「風邪から体を守るビタミンC」「体のバランスを良くするビタミンBの仲間」である。この「トマトレンジャー」がみんなの体を守ってくれるのであり、トマトは世界中の人が食べている。あすかちゃんは、妖精に励まされて祖母の家に帰る。

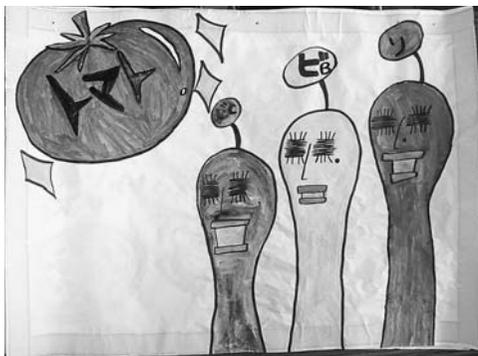


写真5-1 第5場面
（紙芝居5枚目、トマトの栄養について）



写真5-2 第5場面上演風景
（「トマトレンジャー」登場場面、平成22年12月12日）

第6場面（紙芝居6枚目、トマト料理が並ぶ祖母の家）

あすかちゃんは、祖母に対して勝手に家を出たことを謝る。祖母は、色々な国のトマト料理（ケチャップをかけたオムライス、スペインのパエリア、中国の海老チリソース、トマトソースで煮たロシアのロールキャベツ、イタリアのピザ）を作って待っており、デザートには「垢田のトマトゼリー」を用意していることを話す。あすかちゃんは、トマトが作られるまで沢山の人が支えていること、料理を作ってくれた祖母の気持ちに感謝して、今後は少しずつでも食べるように努力することを告げる。



写真6 第6場面
（紙芝居6枚目、トマト料理が並ぶ祖母の家）

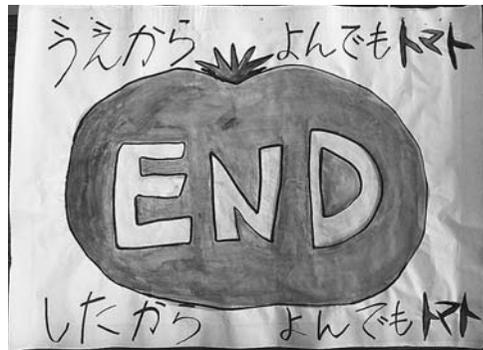


写真7 第7場面
（紙芝居7枚目、終わりの挨拶）

第7場面（紙芝居7枚目、終わりの挨拶）

あすかちゃんは、トマトの妖精と出会い、トマトについて知ることができた。「みんなも好き嫌いせずにいっぱい食べて、大きくなろうね」とナレーターが呼び掛ける。全員、紙芝居の前で整列して挨拶。

2・2・2 食育紙芝居劇「あすかちゃんとトマト」制作・上演上の工夫点

制作における最初の工夫点は、主人公の設定である。「食材に親しみを持つ」ことを伝えるために、あえてトマトが嫌いな子どもを主人公とし、トマトに親しみを持つ過程を表現した。

紙芝居を制作した学生は4名と少数であったが、トマトに対して「好き」「嫌い」がはっきり分かれたため、観賞者となる子ども達の好みも分かれることが、学生にも容易に想像できた。そこで、トマトが好きな子どもに対して、嫌いな子の心情を理解してもらうため、第1場面にて主人公に「わたし、トマト大嫌い。だって、種があって、噛んだ時にぐちゅぐちゅするし、汁がいっぱい出るんだもん」と具体的に嫌いな理由を言葉で表現する場面を取り入れた。それによって、観賞者全員が主人公の嗜好を納得できるよう工夫した。また、主人公が食材への知識を深め、生産者・調理者に感謝できるようになり、食べる努力を行う姿を表現することによ

て、トマト嫌いの子どもにも共感が得られるよう工夫した。

次に制作中、特に配慮したのは「1. 食生活の見直し（正しい食の知識を持とう）」即ち、子ども達に楽しく、正しくトマトについて伝える表現の工夫である。

工夫点の一つ目は、露地物のトマトの旬と「垢田トマト」の出荷時期、双方を分かりやすく伝えることである。多くの学生や紙芝居の鑑賞者となる大半の子ども達にとって、トマトは一年中、店頭と並んでいる野菜である。従って学生は、「垢田トマト」と他のトマトの違い等、トマトについて学ぶ必要があった。そこで「垢田トマト」については、山口県食品産業協議会「まるごと！やまぐちネット」(http://www.marugoto-y.net/nousuitiku/nousan/04_tomato.html)、下関垢田町の村上農園による「垢田のトマト.com」(<http://www.akadatomato.com/>)といったインターネットに公開されたホームページを参考にした。また一般の露地物栽培については、学生の祖母宅で栽培しているトマトについて夏季休業中に調べ、インタビューによって得た知識や畑の様子を撮影した写真を中心にして学習を進めた。その結果、トマトは本来6月～8月に収穫される夏野菜であり、「垢田トマト」はビニール栽培のため3月～6月に収穫期を迎えることを学生は学んだ。従って、双方を誤解なく伝えるために、冒頭1場面目で垢田トマトの紹介を行い、夏休みに行った祖母の家で露地物のトマトと出会う設定にした。

二つ目の工夫点は、子どもに分かりやすく理解してもらうために害虫や病気（第4場面）を「トマトの敵」という言葉で表現し、「トマトの栄養」を元気の味方「トマトレンジャー」（第5場面）と表現して、ペープサート等で紹介したことである。特に後者については、トマトには種々の成分が含まれていることが知られる。そこで、栄養健康学科教員に指示を仰ぎ、リコピン（赤）・ビタミンC（白）、ビタミンBの仲間（黄）、この3つに絞りイメージカラーを当てはめた。そして、上演時にはナレーターがそれぞれの役割を簡単に紹介した（体を元気にする・風邪から体を守る・体のバランスを良くする）。同時に、イメージカラーのバンダナを付けた他のゼミナールに所属した応援学生（3名）に登場してもらい、紙芝居の前に並ぶことによって「トマトレンジャー」が分かりやすくなるよう可視化した（写真5-2）。

三つ目の工夫点は、「2. 食への感謝、食文化の伝承」に対する表現である。祖母が一生懸命栽培しているトマトの生長過程や（第3場面）、無事に実るための配慮を表現することにより（第4場面）、食を支える人々や食材に対する「食への感謝」が湧くようにした。また、祖母が苦心して世界のトマト料理を作ったことの紹介によって（第6場面）、祖母の愛情と世界の人々にトマトが親しまれていることを表現し、「食への感謝」と「食文化の伝承」を表現した。

2・2・3 食育紙芝居劇「あすかちゃんとトマト」上演・感想反省

上演は2回行った。第23回下関短期大学創作発表会（於：シーモールホール、平成22年12月12日）と公開講座「親子で学ぶ「食」と「遊び」」（於：下関短期大学調理実習室、平成23年1月16日）の2回である。

初回はシーモールホールという観客が約180名程度収容でき、音響・照明設備を用意した施設の中で一般市民を対象とした発表であった（写真4-2、写真5-2）。

2回目は、親子約20名を対象に親子で調理をした後に試食後、教室（調理室）で発表を行った（写真8）。双方、約20分、ほぼ台本通りに上演することが出来た。

発表施設・対象者数が異なるため、それぞれに応じた工夫が必要であった。第5場面の「トマトレンジャー」は、初回上演時は他のゼミナール学生3名に登場してもらったが、2回



写真8 公開講座「親子で学ぶ「食」と「遊び」」における紙芝居上演風景（平成23年1月16日）

目はペープサート3枚を制作して表現した。その他、紙芝居の前で行う動作・ペープサートの動きを2回目はやや小さくするように配慮したが、内容は変えなかった。

制作・上演を通じての学生による感想・反省は以下の通りである。

制作（食育）について

- ・食べ物大切さを自分自身が学ぶことができた。保育者になっても伝えたい。
- ・子どもに対し曖昧な事や間違っただけを伝えないよう、事実を調べることが大切と学んだ。
- ・絵を大きく描くように心がけたため、後方の席まで見えたので良かった。

発表に対して

- ・日頃の準備・練習が大切と分かった。
- ・創作発表会の前日リハーサルでは立つ位置や道具の確認しかできず、舞台練習ができなかったため、事前の練習を多めにしてリハーサルに臨む必要があった。
- ・（皆で）協力して一つのものを制作することの大変さ・楽しさが分かった。
- ・他人を楽しませるためには自分自身も楽しんで役を演じなければならないことが分かった。

以上、制作・発表終了後の学生による感想・反省を踏まえた担当教員の反省は「学生の自主性を重んじながら練習の必要性を強調する必要性」「他の出し物・季節感・状況を踏まえた導

入の工夫の必要性」以上2点である。

特に後者、「導入の工夫」について言及すると、創作発表会ではいきなり紙芝居を始め、公開講座では上演前に簡単な手遊びを行ったのみで双方、特に工夫を行わなかった。従って、上演前に子ども達の集中力を高めるためにも「導入の工夫」を行う必要があると感じた。

公開講座は栄養健康学科と合同の開催であったが、事前に紙芝居の内容を伝えたところ、当日に親子で調理した献立（おにぎり・豚汁・卵としらすのサラダ・フルーチェ）のサラダにミニトマトを使用して頂いた。そのため調理・試食が導入の役割を果たし、紙芝居発表を違和感なく行うことができた。但し、参加者には未満児（2名）も含まれており、年齢差が大きかったため、全員に楽しんで頂くことは困難であったことが反省点として挙げられよう。

2・3 平成23年度後期 教育実践報告

平成22年度、食育表現ゼミ所属学生は2年生4名で全員卒業したため、平成23年度に引き続き当該ゼミに所属した学生はいなかった。

平成23年度は全く新たな構成員となり、1年生4名・2年生6名が所属することになったため、初顔合わせの4月13日、年間活動内容について学生から希望を募った。その結果、双六制作（4名）、大型紙芝居の作成・上演（2名）、劇（2名）、その他（2名）となった。そこで、前期「食育双六」を制作して7月の「作品展と工作体験」で展示発表を行い、後期「大型紙芝居劇」を制作・発表して12月の創作発表会で発表することに決定した。また、栄養健康学科は平成19年度から下関短期大学付属幼稚園「おにぎり作り教室」を行っているが⁴⁾、平成22年度末、指導担当教員である塩田博子准教授より「おにぎり作り教室」（於：下関短期大学付属第一幼稚園・下関短期大学付属第二幼稚園）にて大型紙芝居劇を行うことを提案して頂いた。そこで、平成23年度は創作発表会で制作した紙芝居の発表を行わせて頂くはこびとなった。

2・3・1 食育紙芝居「山口さんちのある一日」制作について

平成23年度食育ゼミ所属学生は、前期に『下関ぶちうま食育プラン』（平成20年）について学ぶと同時に、「食育双六」を作成し、被災地に送付した³⁾。

前期の双六制作を通じて、後期初回授業にて紙芝居の主題は山口・下関の食材とし「下関ぶちうま食育プラン」に示す4分野「1. 食生活の見直し」「2. 食への感謝、食文化の伝承」「3. 家族の団欒」「4. 食の安心・安全、地産地消」、この四つを表現した紙芝居を制作・発表することを目標とした。

後期第2回目授業では、前期の経験を基に紙芝居で扱う農産物候補（イチゴ、メロン、豊田梨等）を調べて検討を行った。また、第3回目授業において具体的な主題とあらすじを決定し

た。主題は下関市内で二世帯同居している「イチゴ農家」の「山口さん」一家の一日の出来事とし、あらすじは「イチゴが出来るまで」と「ふく鍋（河豚鍋）づくり」を中心にして、最終場面では鍋を囲んで「家族の団樂を楽しむ」という内容にすることを話し合いによって決定した。台本原案は、2年生が作成した。

また、上演形式についても話し合った結果、平成22年度同様、大型紙芝居を背景として登場人物が劇を演じる表現形式をとることとした。創作発表会で発表した各場面によるあらすじは以下の通りである。

第1場面（紙芝居1枚目、「山口さん」一家の紹介）

下関市内に「山口さん」という六人家族が住んでいた。祖父・祖母はイチゴを栽培し、父親は会社で勤務しており、母は家事をしながら祖父母を手伝っている。姉は小学六年生で、妹は幼稚園の年長組に通っている。



写真9-1 第1場面
（紙芝居1枚目、「山口さん」一家の紹介）



写真9-2 第1場面上演風景
（平成24年3月1日）

第2場面（紙芝居2枚目、病床の母）

祖父母は、イチゴの出荷時期を迎え、12月のクリスマス前（「おにぎり作り教室」では3月雛祭り前）ということもあって、忙しいので母親と姉妹は手伝うことになっていた。朝、姉妹は張り切って起きると、母親が風邪をひいて寝込んでいた。そこで姉妹は、母の分まで手伝うことを決意する。

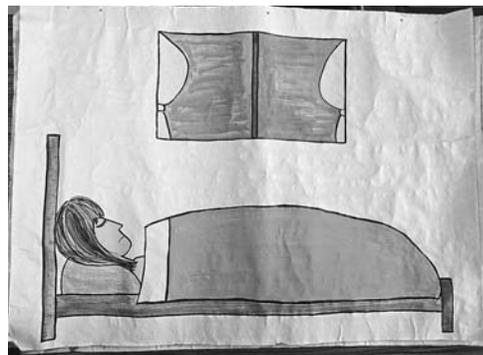


写真10 第2場面
（紙芝居2枚目、病床の母）

第3場面（紙芝居3枚目、冷蔵庫がある台所）

一家は、風邪をひいている母親のため奮発して「ふく鍋」をつくることを決意。冷蔵庫を確認したところ、材料のフグ・ネギ・白菜・シイタケが足りないことに気づく。しかし、祖父母は農作業の後、農協に行かねばならず、父親は会社で一日勤務しなければならない。そこで、姉妹は朝、祖父母の手伝いでイチゴの収穫を行った後、買い物に行くことを決める。

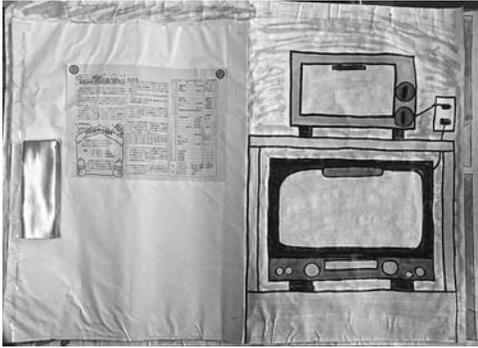


写真11-1 第3場面
（紙芝居3枚目、冷蔵庫がある台所）



写真11-2 第3場面
（紙芝居3枚目、冷蔵庫を開けた様子）

第4場面（紙芝居4枚目、ビニールハウス内・イチゴができるまで）

一生懸命ビニールハウス内でイチゴの収穫を手伝う姉妹の前にイチゴの妖精が現れる。山口さんの一家は「とよのか」を育てており、妖精はイチゴが出来るまで（8月土作り、9月苗植え、10月水やり・手入れ・開花、11月開花後結実、12月出荷）を姉妹に伝える。妖精は「朝摘み」のイチゴが美味しいことを告げて去る。

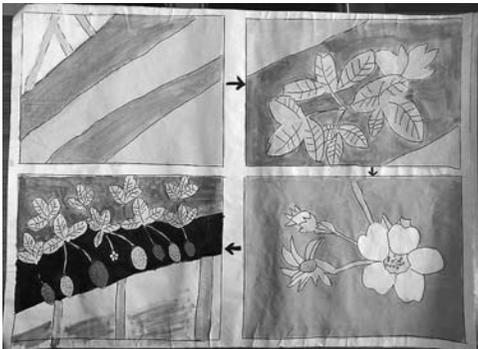


写真12-1 第4場面
（紙芝居4枚目、ビニールハウス内・イチゴができるまで）



写真12-2 第4場面上演風景
（平成23年12月17日）

第5場面

(紙芝居 5 枚目、買い物途中の外の風景)

ビニールハウスでのお手伝いが終わった姉妹は、二人揃って徒歩で買い物に出かける。

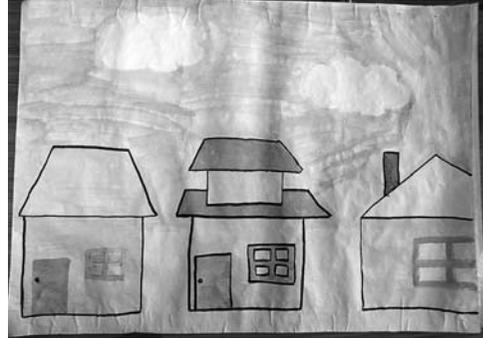


写真13 第5場面
(紙芝居 5 枚目、買い物途中の外の風景)

第6場面 (紙芝居 6 枚目、魚屋での買い物)

姉妹は無事に魚屋に到着。フグを買おうとする姉妹に、魚屋は「トラフグ」(肉がしっかりしている、皮が食べられる)と「マフグ」(ふく鍋によく使用する、トラフグに比べて安い)について説明する。しっかり者の姉は安く美味しい「マフグ」を6人前買う。

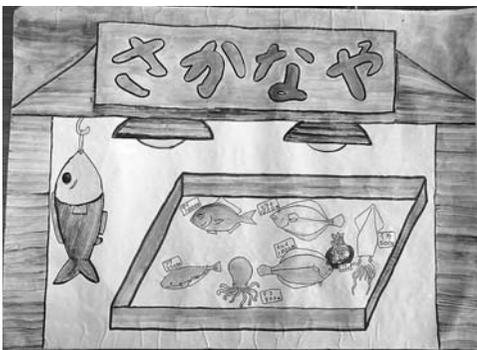


写真14 第6場面
(紙芝居 6 枚目、魚屋での買い物)

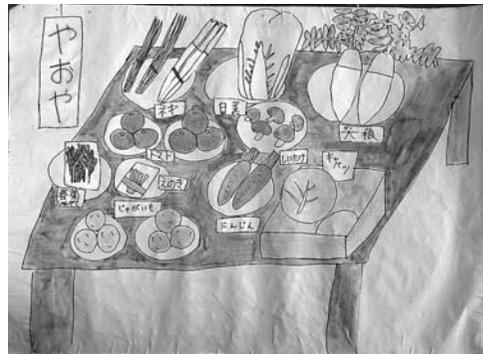


写真15 第7場面
(紙芝居 7 枚目、八百屋での買い物)

第7場面 (紙芝居 7 枚目、八百屋での買い物)

姉妹は八百屋に到着するとネギ・白菜・シイタケを求める。八百屋は、ネギが風邪に良いこと(「硫化アリル」が含まれること)を説明し、鍋を頂く折には、下関市内の安岡で作られた小ネギとポン酢で食べることを提案する。

第8場面（紙芝居8枚目、自宅のテーブル・鍋の準備）

帰宅した姉妹は、祖父母と一緒に鍋の準備を行う。そこに「鍋の妖精」が登場して「ふく鍋」の美味しい作り方が分かる歌を教え、一緒にうたう。妖精は、この鍋には「みんなの元気」という隠し味も入っているので、母親はすぐに良くなると伝えて去る。

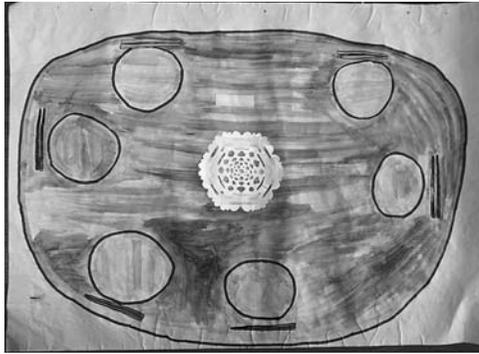


写真16-1 第8場面
(紙芝居8枚目、「山口さん」宅のテーブル)

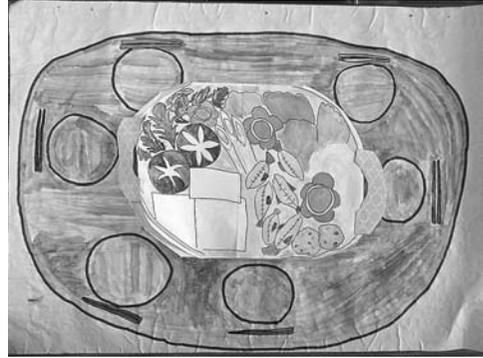


写真16-2 第9場面
(紙芝居9枚目、鍋の乗ったテーブル)

第9場面（紙芝居8枚目、マジックテープで鍋を付けた紙芝居・一家団欒）

鍋が出来たので、姉は病床の母を起こす。そこに父親がお土産として「垢田トマトゼリー」を持って帰宅する。全員そろった一家は、温かい「ふく鍋」を囲む。

登場人物が全員整理後、「イチゴ・フグ・安岡ネギ・垢田トマトゼリーの他にも下関には沢山、美味しいものがあるので、みんなで探して欲しい」というメッセージを伝えて挨拶を行う。

2・3・2 食育紙芝居劇「山口さんちのある一日」制作・上演上の工夫点

制作における最初の工夫は、主人公及び周辺環境の設定である。平成22年度は、所属学生数が4名と少数であった都合上「家族の団欒」を伝えることは困難であった。しかし、平成23年度は所属学生が10名いたので、下関市内の2世帯同居家庭を主人公にすることによって、地元の鑑賞者に対し、親しみを持ちながら「家族の団欒」の良さを伝えられるようにした。また、主人公の姉妹が、地元食材について知識を得る場として、スーパーマーケット（食品スーパーマーケット、総合スーパーマーケット）ではなく、「魚屋」「八百屋」といった専門の小売業者を設定した。

制作途中で特に配慮したのは、前年度と同様、「1. 食生活の見直し（正しい食の知識を持とう）」即ち、子ども達に楽しく、正しくイチゴやフグ等の食材について伝えることである。

イチゴ栽培については、植物図鑑等で色や形を確認した上で、JA 下関農協振興課「しものせきのいちごおいしいよ」(<http://www.ja-shimonoseki.or.jp/einou/strawberry/hinsyu>).

html) 等を参考にした。

フグについては、栄養健康学科教員(木村秀喜教授)の指導を仰ぎ、トラフグとマフグの違い、下関がフグの水揚げが日本一である理由等を学んだ。指導の結果をふまえて、学生は子ども達へ伝える表現を工夫した。二種類のフグの違いについては、ペープサートを使用することによって、異なることが視覚的にも分かるよう工夫した(写真17-1、写真17-2)。

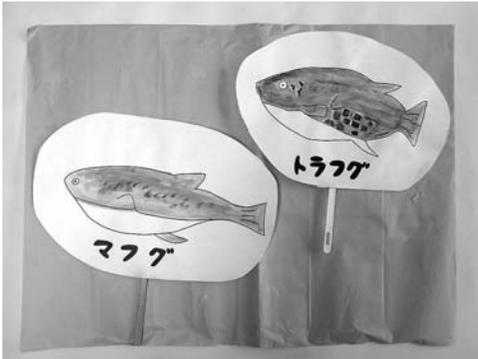


写真17-1 ペープサート
左「マフグ」、右「トラフグ」



写真17-2 第6場面上演風景(魚屋がペープサートを使いながら説明する場面、平成24年3月1日)

また、言葉の表現において特に配慮したのは「フグには毒があるから可食部分が限られる」という事実である。「毒」という直接的な言葉によって子どもに恐怖心を与えることを避け、「食べられない場所があるから、料理するときに気をつけなければならない」という台詞を用いて、出来るだけ肯定的な表現ができるよう工夫した。同時に「お店に並べる前に、職人さんが上手に(食べられない部分を)取ってくれている」「下関には腕のいい職人さんが沢山いる」という説明を加え、下関に対して愛着が湧くように工夫した。

更に、平成23年度に特記される工夫点は、オリジナル・ソングを学生が作詞・作曲し、参加学生全員で踊ったことである(写真18)。

子どもに分かりやすく「ふく鍋」の作り方を理解してもらくと同時に、「家族の団欒」を楽しく表現するため、音楽が得意な学生が作詞・作曲を担当し、音楽指導教員(木戸純子教授)に楽譜作成・楽曲アレンジを依頼して、完成の運びとなった。以



写真18 第8場面「100%ハッピーパワフル」をうたいながら踊る学生(平成24年3月1日)

下に歌詞のみ掲載する。

「100%ハッピーパワフル」(小柳絢作詞・作曲)

1 番：あったか鍋で体がホカホカ ほら家族みんなが元気になるよ

最初にフグさん！ しいたけさん はくさいさんも

みんなみんな集まって 昆布だしの中に 一緒になれば美味しいんだよ

あったか鍋で体がホカホカ ほら家族みんなが元気になるよ

この寒い冬に負けないように 100 パーセント ハッピーパワフル

2 番：あったか鍋で体がホカホカ ほら家族みんなが元気になるよ

最後にネギさん！ おとうふさん 春菊さんも

みんな みんな 集まって 一つの輪の中に！ 一緒になれば美味しいんだよ

あったか鍋で体がホカホカ ほら家族みんなが元気になるよ

病気や風邪に負けないように 100 パーセント ハッピーパワフル

100 パーセント ハッピーパワフル

楽曲の工夫点としては、「あったか鍋で体がホカホカ ほら家族みんなが元気になるよ」というフレーズを1番の冒頭、及び1番・2番の曲の後半部で一番盛り上がる部分に入れたことである。同じメロディーと歌詞が複数回出てくることによって、子ども達にも覚えやすいよう工夫した。

2・3・3 食育紙芝居劇「山口さんちのある一日」上演・感想反省

上演は2回行った。第24回下関短期大学創作発表会（於：シーモールホール、平成23年12月17日）と下関短期大学附属第二幼稚園で開催した「おにぎり作り教室」（栄養健康学科「幼児の食育ゼミナール」指導担当教員：塩田博子准教授、平成24年3月1日、年長児クラスの親子・約50名対象）の2回である。

初回のシーモールホールでの上演は約25分かかり、途中で子ども達が私語をしたり、動き回ったりする気配が感じられた。上演時に子ども達の私語に気づいた学生は少数であったが、12月21日、担当教員を交えて撮影したビデオを鑑賞し意見交換を行い以下の意見を得た。

学んだ点・評価できる点

- ・紙芝居の作成を通じて、地元食材に対して一層興味を持つようになった。
- ・フグは地元の大人にとっても親しみやすい食材だったと思う。
- ・（食材等の）情報を正確に伝えられるよう工夫していたのは良かった。

改善が必要な点

- 長いので子ども達が途中で飽きていた（私語が聞こえ歩きまわる姿が見られた）。
- もっと子どもに呼び掛ける等、飽きさせない工夫が必要。
- ステージ上の全員の笑顔がもっと必要。
- 棒立ちになっている場面もあり、動きが小さかった。
- マイクが上手く繋がらず聞こえにくい部分があった。
- 紙芝居の後ろで待機している人の動きが気になった。

以上のような、活発な意見交換がなされた。これらの意見を取り入れ、第13回目の授業時までには改善した台本を作成して、3月の発表のための練習に臨むこととなった。

台本の主な改善は、以下の二点である。一つ目は、第4場面（イチゴができるまで）を削除して上演時間を約5分間短縮。二つ目は、登場人物が子ども達に問いかけ、子どもの反応に対応する場面を3つ新たに挿入したことである。（第1場面「みんなはお母さんのお手伝いをしている？」、第5場面 買い物移動中「みんな、横断歩道を見つけたら、すぐに渡っていいのかな？」、第6場面 魚屋にて「みんなは トラフグとマフグ、どっちがいいかな？」）。その他には、大きな身振りで発表できるよう練習時から動作を行うことを心掛けた。

3月1日、第2回目の上演は、1年生2名が体調不調で欠席したため8名で上演せねばならず、急遽2名に台本を持ちながら一人二役を務めてもらい、何とか改善した台本通り上演することができた。

初回の上演と大きく異なったのは、第6場面の魚屋の場面である。初回の上演時には、魚屋からマフグとトラフグ、それぞれの説明を受けた後、しっかり者の姉が安くて美味しい「マフグ」を選ぶという筋書きであった。しかし、2回目は、子ども達に多数決でフグを選んでもらう設定に変えた。すると上演時には、より高価な「トラフグ」を選んだ子どもの方が多く結果となり、第2回目は「トラフグの鍋」を作ることとなった。会場では、高価なトラフグに手を挙げた子どもに対して同伴している保護者が苦笑するという、和気藹々とした会場の反応が得られた。

第2回目上演後の反省として、学生から出た意見は以下の通りである。

学んだ点・評価できる点

- 劇中でも子どもと関わりを持ち、双方向のコミュニケーションを取ることが可能と分かった。
- 子ども達も「食育」について関心をもってくれていることが分かり嬉しかった。
- トラフグとマフグの説明も良く聞いており、理解していることに驚いた。
- （幼稚園や保育所の実習とは違い）親子でいる時の子どもの反応を観察でき勉強になった。

- ・（食材等の）情報を正確に伝えられるよう工夫していたのは良かった。
- ・突然、欠席者が出たが、何とか無事に上演できて良かった。

改善が必要な点

- ・突然2名の欠席があったので、対応に戸惑った。
- ・欠席者の穴埋めに精一杯で、身振り手振りを忘れていた。

以上である。担当教員の感想としては、評価できる点として、対象年齢が「年長児」と決定していたため、発達の状況を考慮して事前準備が出来たことである。反省点としては、事前練習が足りなかったことが挙げられる。欠席者への対応を迅速に行うためにも、日頃の練習に力を入れ、学生一人ひとりが担当の役だけでなく、各自が全体を把握できるような練習の必要性を痛感した。

3 おわりに 一感想・反省と今後の活動一

（第一次）『下関ぶちうま食育プラン』等の社会的動向に対し、平成22年・23年度「食育紙芝居」の作成・発表を通じ、授業目標「『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上」は、概ね達成できたと考えられよう。学生は、紙芝居の制作・発表の過程において「地元食材」について学び、「食育」をよりよく表現するための工夫について、実践を通じて学ぶことができた。

平成22年度は上演ビデオを観ながらの反省会を行わなかったが、平成23年度にビデオ鑑賞・反省会を導入したことは、学生の表現力向上に対して大きな役割を果たしたと考えられる。更に、ビデオ鑑賞後、改善した台本で紙芝居を行った平成23年度学生による「劇中でも子どもと関わりを持ち、双方向のコミュニケーションを取ることが可能と分かった」という指摘は重要と考える。このように、学生主体の紙芝居作成・発表・反省に基づいた改善・発表、という一連の活動を通じて、子どもとのコミュニケーションの可能性を模索し、考察する姿勢がみられたことは重要であろう。

平成22・平成23年度の当該活動における担当教員の反省点として、主に三つが挙げられる。

まず一つ目は、2カ年度ともに制作した紙芝居に対する実践練習・改善の時間が少なかったことである。初回上演の前に、出来ればビデオ撮影等を行い、学生自らが客観的に自己の作品を振り返り、改善点をみつけることによって、より良い作品制作・発表ができると考えられる。

二つ目は、場に応じた導入・上演の工夫である。音響・照明施設がある約180名以上収容可能な施設と、音響施設等がない50名程度の教室で行うのには、それぞれ別な表現の工夫が必要である（写真19-1、写真19-2）。



写真19-1 「あすかちゃんとトマト」第3場面
(於：シーモールホール、平成22年12月12日)



写真19-2 「あすかちゃんとトマト」第3場面
(於：本学調理実習室、平成23年1月16日)

三つ目は、子どもの発達に応じた台本・表現づくりの工夫である。創作発表会では、来場者の年齢幅が大きいため対応が難しいが、予め対象年齢をどう設定するのか、何歳児以上に問いかける工夫をするのか、設定段階で決定しておく必要性を感じた。

今後、更なる学生の資質向上を目指すと同時に、地域交流にも寄与できるゼミナール活動を展開することを目標としたい。同時に「大型紙芝居」以外の「食育表現」として相応しい表現媒体・発表方法についても工夫・改善を行っていきたい。

謝辞

食育表現ゼミナール活動を行うにあたり御教示頂きました本学教員（栄養健康学科：木村秀喜教授・塩田博子准教授、保育学科：木戸純子教授）、参加した保育学科学生〔平成22年度：2年生（久保田有稀・品川真由実・福富明日香・森野紗由美）、平成23年度：1年生4名（尾関美香・久原春香・静間亮太・宮内牧穂）・2年生6名（上野仁美・倉重真未佳・小柳絢・橋本美穂・村上裕樹・安田奈緒子）〕、そして本稿に対して和文題名・要旨を英訳頂いた David Kalischer 氏（福岡市総合図書館映像資料課勤務）に対し、記して謝意を表します。

引用・参考文献

- 1) 下関市編集・発行：「下関ぶちうま食育プラン」, 2008.
- 2) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 —「山口食育カルタ」制作を通して—, 下関短期大学紀要, 29号, 2011.
- 3) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第2報—「食育双六」制作・被災地送付を通して—, 下関短期大学紀要, 30号, 2012.
- 4) 塩田博子・芳賀絵美子：付属幼稚園と短大の食育についての連携の試み—3年間の意識変容と事業評価—, 下関短期大学紀要, 28号, 2010.

参考ウェブサイト

- 山口県食品産業協議会「まるごと！やまぐちネット」
(http://www.marugoto-y.net/nousuitiku/nousan/04_tomato.html)
- 下関垢田町の村上農園「垢田のトマト.com」(<http://www.akadatomato.com/>)
- JA 下関農協振興課「しものせきのいちごおいしいよ」
(<http://www.ja-shimonoseki.or.jp/einou/strawberry/hinsyu.html>)